

無痛分娩

専門家医師による自己調節硬膜外鎮痛



恵寿総合病院 産科・麻酔科

2014.7.10

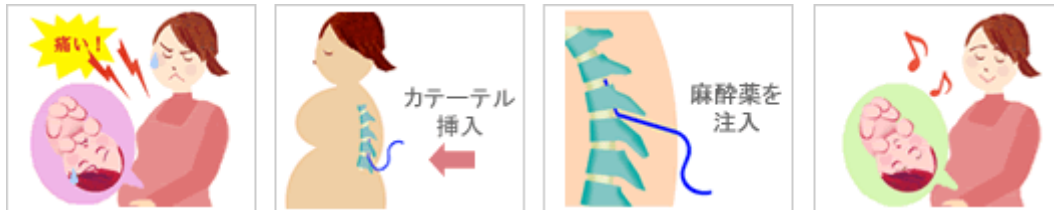
痛みの少ないお産 —— 専門家医師による自己調節硬膜外鎮痛

恵寿総合病院では、皆様の安全で安楽な出産のお手伝いができるチーム医療体制を整えております。痛みの専門家(麻酔科医師)による硬膜外麻酔で、安全で選択的(ピンポイント)に痛みをコントロールできる痛みの少ないお産が可能となりました。

■ 硬膜外無痛分娩について

硬膜外麻酔を用いて分娩時の痛みを和らげる方法を「硬膜外無痛分娩」といいます。無痛分娩の中で、最も一般的な方法です。

硬膜外腔(こうまくがいこう)と呼ばれる、背骨の中にある、脊髄神経を包む膜の外の狭い間隙に細くて柔らかいチューブ(カテーテル)を挿入します。そのカテーテルに局所麻酔薬を注入することで痛みを和らげる方法です。



♡ 硬膜外無痛分娩のメリット

1) お母さんの意識がはっきりしています。

お腹から下の部分に効く麻酔ですので、お母さんの意識がはっきりしています。

2) 赤ちゃんへのお薬の影響がほとんどありません。

使用する麻酔薬の量が非常に少ないため、赤ちゃんへ麻酔薬の影響が出る心配がほとんどありません。

3) ストレスの軽減

自然分娩の際には、痛みのためにお母さんの血圧が上がったり、過呼吸になったり、場合によってはパニック状態になることもあります。このような状態が長く続くと、胎盤への血液の流れが少なくなってしまう、赤ちゃんにとってもかなりのストレスになりお腹の中で元気がなくなってくる場合もあります。無痛分娩により痛みが緩和されることで、お母さんの循環、呼吸が安定し、ストレスが軽減することで赤ちゃんも元気を保てます。

4) 体力の温存

出産は基本的に時間がかかります。数時間～十数時間を痛みに耐えながら過ごすのと、痛みを和らげた状態で過ごすのでは、体力の消耗が全く違ってきます。硬膜外無痛分娩はカテーテルを入れている間は長時間でも続けることができますので、長時間を要する出産には最も適しています。

最近が高齢での初産の方が増えていること、また核家族化で出産後もすぐに上のお子さんのお世話もしなければならない、など、出産後の体力の温存も大切になっています。そういった点でも大きなメリットになります。

5) 家族とのゆっくりとした時間を過ごせます。

強い痛みを伴った陣痛に耐えて過ごすという時間ではなく、穏やかに分娩までの時間を過ごせます。最近では直前までお仕事をされる多忙な方も増えていますので、この時間にやっにご主人やご家族とゆっくりとお話をされたり、あるいは出産後のさまざまな不安点、質問などを落ち着いて助産師に質問したり、といった時間にあてることもできます。

6) 痛みをコントロールした状態で、しっかりといきんで出産できます。

足に力が入らなくなるような強いお薬は使いませんので、ご自分でしっかりといきんで出産していただきます。ですから、ご自分で出産したという実感が無いのではといった心配はいりません。

7) 産科麻酔科医や助産師がお薬の効き目や安全性のチェックを常にしています。

8) 万が一帝王切開が必要となったときにはカテーテルをそのまま利用して、直ちに帝王切開の麻酔に切り替えることが可能です。

どんなに問題のない妊娠経過であっても、帝王切開が必要となる可能性はゼロではありません。これは、無痛分娩であるなしにかかわらずあります。このような状態では、一刻も早く赤ちゃんを生ませてあげることが必要になってきます。このとき、硬膜外無痛分娩で背中にカテーテルが入っていると、このカテーテルを使って直ちに帝王切開の麻酔に切り替えられ、速やかに帝王切開が行えます。これも大きなメリットです

■ なぜ痛みが和らぐのでしょうか？

分娩の際の痛みは、



の二つの痛みです。

そして①痛みを感じる神経と②子宮が収縮したり、赤ちゃんを産み出そうといきんだりする神経は別の種類の神経になります。

- (1)痛みを感じる神経・・・知覚神経
- (2)子宮の収縮やいきみの神経・・・運動神経

硬膜外麻酔によって知覚神経を主にブロックし、運動神経への麻酔の影響は最小限になるように、すなわち分娩の進行を邪魔しないようにすることが無痛分娩の麻酔技術の大事なポイントとなります。幸い、痛みを感じる知覚神経は運動神経よりも細いので、薄い濃度の麻酔薬で主に知覚神経のみをブロックすることが硬膜外無痛分娩では可能になります。

麻酔薬の濃度が濃すぎると、知覚神経だけでなく、運動神経までブロックしてしまいますので、分娩が進行しなかったり、足に力が入らなくなり自分でいきんで出産することが困難になります。

ですから分娩時には、分娩の進行を妨げず、自分で足を動かすことができ、痛みも和らげるといふ濃度の麻酔薬を用いるのが理想ということになります。

痛みの感じ方には個人差があるということ、初産婦か経産婦かによって分娩の進行の速さや痛みの程度に差があるということ、そのため同じ濃度のお薬を同量投与しても、全く痛みを感じなくなる方もいれば多少痛みが残る方もいらっしゃいます。一概には言えませんが、痛みが残った場合でも`生理痛程度`であることがほとんどです。

| 「硬膜外無痛分娩」の前には「麻酔科外来」へ

硬膜外無痛分娩を希望される場合、まず硬膜外無痛分娩が可能かどうか、麻酔科医が診察いたします。血がとまりにくい方や背骨に異常のある方、硬膜外カテーテルが入る部分の皮膚に感染のある方などは硬膜外無痛分娩を行えない場合があります。安全かつ円滑に硬膜外無痛分娩を行うために、お産の前に麻酔科外来で麻酔科医からの説明と診察を受けておかれることをお勧めします。麻酔科外来を受診したからといって、必ずしも無痛分娩を受けなければならないということはありませんので、お気軽に受診下さい。また、麻酔科へ受診の際には、ご家族にも同伴して頂き、いっしょに説明を受けていただくことをお勧めします。(麻酔科外来受診料は、別途2820円がかかります)。



| 硬膜外無痛分娩の費用は？

麻酔科医が硬膜外チューブを挿入した時間からお産までにかかった時間で、費用が異なります。86,000円(麻酔している時間によって加算があります)～ 通常分娩費に別途加算されます。

※ご不明なことは、外来助産師または麻酔科受診時に医師にお尋ねください。